

空白ある手紙——*The Floating Opera* について※

小林 史子

I

John Barthの処女作 *The Floating Opera* (1956; rev. 1967) は、弁護士 Todd Andrews によって書かれたという結構になっている。Todd は主人公であり、語り手であり、「作者」でもある。その彼は第一章で、川の流れのままに漂う架空のショウボートのように、この作品は書かれている、と打ち明ける。そうしたショウボートの観客は土手に坐り、目前を通りすぎる時だけショウボオを見物するのであって、見られない、あるいは聞きとれない部分は想像力で補わねばならぬのだ、と彼は言う。その前後を引用する。

To fill in the *gaps* they [the audience]’d have to use their imaginations, or ask more attentive neighbors... I needn’t explain that that’s how much of life works: our friends float past; we become involved with them; they float on, and we must rely on hearsay or lose track of them completely; they float back again, and we either renew our friendship... or find that they and we don’t comprehend each other any more. And that’s how this book will work, I’m sure.¹

(斜字体部筆者)

彼はここで人生とショウボートとの類似にふれ、結局、「空白」(gaps)多き人生のあり様に似た小説を書いた、と言っているのだ。そして、それはとりもなおさず、彼が「空白」を意識的に小説の中にちりばめたことを意味する。Todd は読者受容理論を先取りするかのように、明らかに読者の想像力を小説成立の過程の中に予め組みいれているのである。

なるほど、Todd の言う通り、読者は語りの中の空白にしばしば出会う。登場人物として、また語り手としても、時々、彼の真意がわからなくなるのである。彼は主として1937年6月のある1日の出来事を語るのだが、その時、総じて自分の行動については雄弁なのに、その動機については寡黙である。時には矛盾する事柄も平気で述べ、読者をはぐらかし、自らを韜晦してみせる。いわく、“Irresponsibility, yes: I affirm, I insist upon my basic and ultimate irresponsibility. Yes indeed.” (p. 83)。あるいは “...being less than consistent in practically everything, so that any general statement about me will probably be inadequate.” (pp. 56-7)。その通りかもしれない。しかし同時に、モノマニアクと思えるほどにひとつのことに固執する彼の姿を、読者は目にすることも確かである。つまり、彼はいわゆる “unreliable narrator”² に他ならない。従って、unreliable な語りの中に reliable なるものを見出したい読者は、まさにショウボートを見る観客のごとき想像力をもって、彼の語らぬ空白部分を埋めなければ

ならないのである。

しかし「空白」を埋める作業は、実は登場人物としての Todd によっても行われている。この小説が人生のあり様にのっとって書かれている限り、作品中で人生を生きる Todd も「空白」に出会い、それを埋めようとする作業から逃れるべくもないというわけだ。結論めいたことを先走って言うならば「空白」ある手法を用いて、「空白」を埋めようとする自己について主人公が語る、というのが、この小説の基本的構造である。言いかえれば、手法と内容の間に自己相似性が見つけられる、ということになるのか。自己相似性は、Barth のもっと後の作品、*Lost in the Funhouse* (1968) あたりから

顕著な特色となるのだが、「空白」に注目する時、すでに処女作から Barth がこの特色をもっていたことが明らかになるのである。

さて、本稿は Todd をめぐる「空白」について考察するものだが、その手掛かりを作品中に多数現出する「手紙」に求めたいと思う。「手紙」には、letter, note と表記されたもの、遺書やメモを含める。それらは 12 件 (12 通ではない) にのぼる。そして後述するように、この小説全体を Todd の亡き父への「手紙」だとみなすならば、13 件に、さらに何らかのメッセージ性を含む事物 (遺産やビラ) までいれると 16 件にもなる (別表参照)。

まったく多くの「手紙」が Todd の人生にはかかわっているものだ。Barth は後年、それまでの自作全部を取りこんだ *LETTERS* (1979) を書くにあたり、書簡体小説という形式を選んだ。むろん、この選択は 18 世紀に流行した形式、つまり小説の祖型にあえて戻ろうとする意図に基づくのだろう。ちょうど *The Sot-Weed Factor* (1963) を書いた時の意図がそうであったように³。だが、処女作における「手紙」の多さは、この選択とまるで無関係であったのだろうか。処女作とは作家自身にとっては、祖型に他ならない。Barth がそう意識していたかどうかは不明だが、自作を異化し、セルフパロディを創り出す達人たる彼が、小説というジャンルの祖型のみならず、自作の祖型に戻ったとしても、それは当然の成り行きである。

それにしても、Todd をめぐる「手紙」は意思疎通の手段という本来の機能を発揮することが実に少ない。それらには書き手と受け手の相互理解が欠落している。いわば「空白化」されているのだ。出さず仕舞いに終るもの (別表の 10, 11)、冗談ごとと解され、一笑に付されるもの (1)、受け手の死後に届く、いわゆるデッドレターとなる可能性をもつもの (6, c)⁴ などがある。なお、別表の 2, 8, 9, 12 は、そのような不幸な「手紙」のあり様を浮き彫りにする補助的役割を果たしている。さらに「手紙」それ自体の内部に、何らかの形で歴然とした「空白」をとりこんでいるものがある。3, 4, a⁵, 5, 7, b, 13, がそれにあたる。これらは、他のものより、深く Todd にかかわっていると考えられる。そこで特にこれらの「空白ある手紙」に焦点をしばり、検討するこ

手紙のリスト

1. Todd から Jane への note (4 章)
2. Jane から Todd への note (9 章)
3. Junior Miner から Todd への letter (9 章)
4. Eustacia から Todd への letter (9 章)
 - a. 水上オペラの handbill (9 章)
5. Mack, Sr. の will 17 通 (10 章)
6. Marvin の診断書 (14 章)
7. 父の遺書 (\$5,000 と note) (21 章)
 - b. Todd から Morton への \$5,000 (21 章)
8. Morton から Todd への letter (21 章)
9. Todd から Morton への返事 (21 章)
10. Todd から Jimmy への note (23 章)
 - c. Todd から Mack, Jr. への \$3,000,000 (24 章)
11. 父への letter 数通 (25 章)
12. Jimmy への note をおさえるための郵便局宛の note (29 章)
13. この作品総体

とによって、最終的にこの作品における「空白」の役割を明らかにしてみたい。

II

先にこの作品全体が Todd の亡父にあてた「手紙」(別表の13)だとみなせる旨を述べたが、それをまず確認しておきたい。むしろ、この作品は Todd から読者に向けられた語りであるのだが、とりわけ彼が対象とするのは自殺を遂げた父親であると考えられる。彼は作品の最終部で、“I would take a good long careful time, then, to tell Dad the story of *The Floating Opera*” (p.247) と明言しているからだ。作品を創りあげる資料として、彼は人生についての考察を書きためた「調査書」(the *Inquiry*)を使う。「調査書」は彼が20才の時に書き始めた「父への手紙」(別表の11)に端を発する。心内膜炎にかかり、いつ死ぬかわからぬ状態だと父に告げるべく手紙を書くが、彼はそれを投函しない。数通のそれらの手紙は、やがて「調査書」へと発展していく。「父への手紙」こそ Todd の内省の記録の原点であり、その終点は、父へと宛てたこの作品ということになる。その意味でこの作品も「父への手紙」であり、しかも先述した通り、Todd の語りには「空白」が内包されているが故に、作品自体を一通の「空白ある手紙」とみなせるのである。

さて、Todd の人生の中にたち現われる「空白ある手紙」には次のようなものがある。第一に、文字通り文面に欠落のある手紙がある。Junior Miner からの脅迫状(別表の3)と Eustacia からの報告書(4)がそれである。ともに弁護士として Todd が職務を遂行する過程で受けとったものだ。

まず脅迫状であるが、“I will kill you *m—g* son of a *bich* if come on Pine street *m—g* son of *bich* you know why. J.M.” (p.73, 斜字体部筆者) という短いものだ。この中に *m—g* という伏せ字表現と *bitch* を *bich* とした欠落のある綴りが二度づつ見られる。一方、Eustacia は係争中の自分の雇主 Mrs. Mack, Sr. が亡夫の遺志に反した旨を告げる。“Mr. Andrew. Mrs. Mack, has put pickle jars in *grenhouse*. R.J. Coler, has put on *zinas*. Eustacia M. Callader. R.J. Coler, has put 72 bottles on *zinas*. Eustacia M. Callader.” (p. 105, 斜字体部筆者) というのが、報告書の内容である。教育程度が高いとは思えぬ彼女の認めた「手紙」にも綴りの誤りがある。斜字体部は、それぞれ *Andrews*, *greenhouse*, *zinnias*, *Collier* とすべきものである。これらの誤りは文字を欠落させたものばかりであって、過剰に文字を加えた誤りはひとつもない。

伏せ字表現や欠落ある綴り方は、いかにも1937年当時の黒人のチンピラやメイドの「手紙」においては見受けられそうな、ありふれた現象であろう。作品にコミカルな雰囲気を与える小道具である。しかし、伏せ字表現と欠落ある綴り方とは、やはり「空白」の一種だと考えたいのである。

確かにあげつらうには、ささやかすぎる「空白」かもしれない。だが、作品の冒頭部における Todd の自己紹介に注目するならば、綴りひとつも無視したくはないものである。彼は自己紹介をする際に、Todd とはドイツ語で死を意味するから、Todd とは “almost death” (p.3) である、といった説明を自分の名前に対して加え、冗談めかしながらも作品のテーマを匂わせているのである。

Miner と Eustacia の「手紙」には、書き手と受け手の相互理解が欠如している。両者の思惑にはズレがあるのだ。Miner は Todd が妻によからぬ気持を抱いたために自分を離婚させたと思いき、恨んで脅迫状を送り続けてくるのである。むしろ Todd にはその気持はない。受け手は書

き手の気持など一顧だにしない。また、Eustacia は自分の報告書のもつ重大さ——Todd に有利な証拠を教えているのだという意味——をまったく理解していない。書き手は受け手の依頼によって、見たままを認めたにすぎない。つまりこれら二通の「手紙」は誤解と無理解のうちにそれぞれ作成されたのだ。となると、ここにある「空白」は書き手と受け手の間にひそむ相互理解の欠如を表す、ささやかだがもっともわかり易い表徴と考えてもよいであろう。

第二に遺志の「空白化」された「手紙」、すなわち遺書がある。Harrison Mack, Sr. の17通にも及ぶ遺書（別表の5）と Todd の父のそれ（7）である。富豪 Mack, Sr. は気に入らぬ事態の出来と、お気に入りの人物の出現の度に遺書を書き変え続け、死に至る。通常の場合と違って、いちばん新しい日付の遺書を有効とみなせないのは、彼が晩年狂気におちいり、その度合を深めて死亡したためである。17通の遺書は、いわば迷宮のごとく存在し、最後の正気が読みとれる遺書はどれか、つまり真の死者の遺志とは何か不明となっているのである。それを探るのが弁護士の仕事かもしれないが、Mack, Jr. を係争相手（実母の Mrs. Mack, Sr.）に勝たせることのみ、Todd は腐心する。彼は社会状況の変化や、判事の人事移動にまで目配りをきかせ、依頼主にして友人である Mack, Jr. に有利な証拠だけを着々と入手する。“That will-o'-the-wisp, the law...” (p.82) とうそぶき、捕えどころのない法律を意のままにねじふせる彼は、あたかも知的ゲームを楽しんでいるかのような、敏腕弁護士である。ここでは、「空白化」された故人の遺志を探る作業は、裁判に勝つために最初から棚上げにされているのだ。

ところが、彼は父の遺志については棚上げができないのである。父は1929年の大恐慌による破産のため自殺したとされ、彼に5000ドルと「手紙」（別表の7）を残すが、Todd はそれを遺書と呼びもしない。その「手紙」について彼は次のように言う。

There was a note, too, which I must have suppressed—it's honestly, completely gone from my mind—because it said all the things I certainly didn't want to hear, in just the wrong language. (p.180)

彼が明かさぬ以上、その「手紙」の内容を読者は知ることはできないが、そこには Todd が知りたいと期待していたものが欠如し、「空白化」していたということだけはわかる。凡庸なる俗人にとって、破産は十分な自殺理由であろうが、Todd にとっては違う。“...if one chooses to die for mercy's sake let this choice be more *reasonably founded* than Hamlet's...” (p.169, 斜字体部筆者) と彼は言う。自殺理由は「理性的に構築され」なければならないのだ。父の遺書に「空白化」されていたのは、彼を納得させてくれるほどに「理性的」な自殺理由であったのである。彼は俗人ではなく、理性に執着する故に、父の遺書には「空白」を見出してしまったのである。Mack, Sr. の遺書への対応ぶり比べると、「手紙」の「空白」とは、それを埋めようとする人間を得ると、皮肉にも生じてしまうことがよくわかる。Todd はこのパラドックスにおちいり、そこから脱出できない。彼の人生は、父の死の真の理由の探究に費やされる。そして、そのために人生一般についての内省の記録——「調査書」——を作る作業を延々と続けるのである。

Todd のおちいったパラドックスを避けるには、「空白」補填の努力を棚上げにするしかない。それは先述した Mack, Sr. の遺書についてのエピソードだけでなく、次のような事柄の中でも示されている。

Todd は父の遺産5000ドルを町一番の金持、Morton に理由をつけず送りつける。Morton という男は別のエピソード、Butler との係争問題において傍証されるように、利害のみで物事はは

かるので、Todd の真意がつかめない。(ただし、読者にもそれは明示されていない。読者はとりあえず、「Todd は理由のわからぬ自殺がもたらした遺産など、受けとりたくないのだ。だから金そのものを侮辱するために、俗悪な人物のもとへ贈った」とでも想像することができようか。だが、言うまでもなく読者には他のいかなる理由をも想像する自由がある。) Morton は狐につままれたように思う。送り手(書き手)の真意のわからぬ「金」(別表のb)は、この時彼にとっては「空白ある手紙」となるのだ。彼は金をもらうために、「空白」を埋めようとする。辻褃を合わせたいのだ。うまみのあるポストを次々と Todd に提供しようとするのは、彼なりの「空白」の埋め方である。もちろん、Todd は申し出を断り続ける。Morton は戸惑うが、最終的に金銭欲がすべてに優先する。彼は「空白」補填の努力を放棄して、金を受け入れるのである。

動物的欲望が何よりも優先するエピソードは、他にもある。Jeannine は“Why?”という幼児特有の質問を連発して Todd を困らせるが、アイスクリームをせしめる時、Todd から、なぜ欲しいのかと逆襲を受けても、“I want one”(p.199)と言い続けるだけだ。疑問をつきつめずに欲望に屈する方を選ぶ Morton や Jeannine は、あのパラドックスにおちいることのない幸福者である。

ところで、この Jeannine の真の父親は誰かと詮索する者はいないが、これも「空白」補填の棚上げの一例であろう。Mack, Jr. と Jane の夫妻から Todd に対して仕掛けられた三角関係の果てに生まれたこの娘の父親は誰か、という問題は不問に付されたままだ。「理性的」に追求すればすぐわかることなのに、そうしない。しかし、それによって Todd は Jane とともに、娘とも、うまく関係を保ってこられたのである。三角関係にかかわった三人の賢明なる默契である。

III

では、なぜ Todd は父の遺言の「空白」だけは埋めたいと思ひ、それに固執するのであろうか。そのためには、彼が他者とどう関係を結ぶのか、その特徴に注目しておきたい。

Todd は自分が“rake,” “saint,” “cynic”という順に仮面をつけかえながら生きてきたと再三語っている。心臓病を宣告されて以来、死の恐怖を忘れるために放蕩に走り(1919年から24年まで)、次に前立腺を病んで入院している間に現実逃避をしても無駄と悟って聖者になった(24年から30年まで)。しかし、父が理由のわからぬ自殺を遂げて以来、冷笑家になってしまった、というのである。つまり、苦難に出会う度に彼は変化してきたわけだが、その変化をわざわざ仮面のつけかえと称するのは、彼が意識的にそれを行ってきたからである。彼は仮面をつけている間は、一貫して他者に対して仮面にふさわしい役割(アイデンティティ)を演じてみせるのである。

彼の他者との関係は、基本的に演戯によって保たれているのだ。その演戯とは、他者の思惑を察知し、期待に沿った人物像を演じることで成立する。例えば、Mack, Jr. 夫妻から三角関係を仕掛けられた時、当時“saint”の仮面をつけていた彼は、それらしくみせるために童貞を装い、夫妻を喜ばせるといった手を使う。彼が演じているのは、まさに R.D. Laing の言う“His identity-for-himself...the identity or identities he thinks they [others] attribute to him; what he thinks they think he thinks they think....”⁶なのである。

他者の思惑に敏感な Todd は、唯一の肉親たる父に対しては一層敏感さをつのらせる。心臓病を告白する「手紙」を書くうち、父との間には“Imperfect communication”(p.216)しかないと気づき、その原因は自分の側にあると思うが故に、「手紙」を投函しないのである。彼は言う、“I had, you see, always assumed that the source of the imperfection was in myself....”

(p.217)。その原因を探るために「調査書」へとやがて発展していく投函しない「手紙」を書き続けるのである。父に自分を理解させる働きかけは一切せず、自分を父の思惑に近づけ、父の期待に沿うべく心をくぐらせた。彼は神の沈黙の中に、意思を懸命に読みとろうとする人間にも似る。

しかし、その努力は実を結ばない。父の期待通り弁護士になり、父と一緒に住み、“I...to my great pleasure found myself—or so I believed—closer to him than I’d ever been before” (p.217) と彼が言えるようになった頃、父は自殺をするのである。父は息子を捨てたのだ。Todd が父の遺書の「空白」に執着するのは、父を求め、父とのコミュニケーションを完全なものとし、父との疎隔感を埋めたいと、彼が永年にわたって願ってきたためである。

そして、求めるが故に他者が離れてしまう、ということも Todd の他者とのかかわり方のもうひとつの特徴である。以下の三例にそれはよく表われている。

まずは初めての性交渉の時。寝室の鏡に映る、自分の情欲の姿の滑稽さに、17才の Todd は哄笑する。その結果彼の初体験はみじめに終り、相手の少女を深く傷つける仕儀となる。次は第一次大戦中のことである。志願兵として敵のドイツ兵の1人と個人的和戦を果たし、同性愛を思わせるほどに抱き合うが、じきに猜疑心が芽生え、恐怖に変わり、ドイツ兵を殺すに至る。さらに自殺を決意する前夜。その夜、情事の場での Jane の一言が、彼を性的不能におちいらせる。心臓病について何も知らされていない彼女は、彼の両手の指の醜さを無邪気に指摘するのだが、この醜さは心内膜炎のせいであり、いつ襲うかもしれぬ死の到来を示す可視的表徴である。

どの場合も、Todd は睦みあいの瞬間にまで身をもっていきながら、和合を果たせないのである。いつも理性が介入するからだ。若き自らの情欲を滑稽ととってしまう醒めた眼、ドイツ兵に対する猜疑心、心臓病による突然死の自覚——これらは理性の作用によるものであろう。しかし、次の瞬間、どうにも止められない哄笑、殺人に至るほどの盲目的恐怖、そして回復の余地のない性的不能といった理性では抑えられない不条理な力が彼を襲い、彼を他者から引き離す。睦みあいに理性をもちこみ、それ故に動物的不条理な力に捕われるといったメカニズムの中にはまりこみ、自縛されてしまうのである。Todd とは、まことに孤独なる男である。

言いかえると、彼は“doubler”になれぬ男である。“doubler”とは作品の背景となっているチェサピーク湾に多く棲息し、交尾の姿勢のまま、水中に長時間留まる一対の蟹のことだ。彼はこの一対の小動物を、“just as Plato imagined the human prototype to be male and female joined into one being” (p.53) と形容する。また三角関係の中止をほのめかす Mack, Jr. と Jane の夫妻の姿にこれを重ねあわせてみたりもする(23章)。理性と無関係に自然の摂理に従って和合し、生を享受する“doubler”には、自己と他者を隔てるもの、すなわち「空白」がないことは、その形がよく示すところだ。“doubler”とは、「空白ある手紙」の対極点をさし示すメタファーとも考えられるであろう。

ちなみに Todd の自殺決行の日は、6月21日か22日とされているが⁷、この日付は双子座から蟹座へと天体に移る時であり、“doubler”になれぬ男に、いかにもふさわしい。

Todd は自分を含めて理性に自縛される者に対しては嫌気を感じているようだ。その証拠に二人の対照的な老いた友人に対する彼の態度には、大きな差がある。Captain Osborne と Mr. Haecker は、共に老齢の故に、いつ死ぬかわからぬという点で Todd と同じ生の条件を抱えている。Osborne は死を恐がり、罵りながらも、性欲も失わず、自然の営みに逆らわずに死を迎えいれようとしている。だが、Haecker は死を「理性的」に受けとめようと懸命である。老齢をキケロを引いて美化したり、生命には価値があると無理に思いこもうとする。彼は理性によって納得したがる点で、Todd とよく似ている。Todd は Osborne には、正直に性欲を告白した代償として、

Jane を提供しようとするが、Haecker には自殺を示唆する。

さらに彼は水上オペラにおいても、自分と似た者を冷酷に揶揄する。このシヨウは、小規模ながらも、一種の生の祝祭だと考えられる⁸。祝祭につきものの犠牲はシェイクスピア役者の Whittaker だ。彼は “All the world’s a stage” というジェイクスのセリフ、シーザーの遺言状を含むアントニーの演説、ハムレットの独白を演じていくが、これらはすべて Todd の心情と状況にびたりと符合する。その意味で、この演目は作品自体の縮図とも言えよう。Whittaker の演技はことごとく観客の不興をかう。彼らは野次とコインを彼に投げつけ、次の演目のミンストレル・シヨウの即刻の開始を望むばかりだ。ボーダー・ステイトに住む善良な市民たちの、シェイクスピアによる、生や死や老いに関する考察への反応とは、こんなものである。

次のミンストレル・シヨウでは、インテリ風の司会役はボケ役によって、やつつけられる。そこに快哉を叫ぶ市民たちにとって、陰気な哲学的考察は、祝祭的秩序を乱す故に排斥すべき対象でしかない。意地になって舞台にしがみつき、演技を続けようとする Whittaker は、理性にしがみつき、父の遺書の「空白」にこだわり続ける Todd の自己戯画像と受けとれるのである。Todd は他の観客と共に、Whittaker の舞台からの放逐に喜んで手を貸し、舞台から陰気さを一掃する。これは彼の自己揶揄に他ならないであろう。

IV

さて、父の遺書の「空白」へと、再び論点をひき戻そう。Todd は最終的に、自分はその「空白」は埋められないと自覚するに至る。理性があけた「空白」を、理性によってのみ埋めるのは、しょせん無理なことである。彼は次のように語る。

It [the *Inquiry*] is an attempt to learn why my father hanged himself, no more. And no less—for it became apparent to me after a mere two years of questioning, searching, reading... that there is no will-o'-the-wisp so elusive as the cause of any human act.... In fact, it is impossible, for as Hume pointed out causation is never more than an inference; and any inference involves at some point the leap from what we see to what we can't see.... You understand, do you, that the nature of my purpose—to make as short as possible the gap between fact and opinion—renders the *Inquiry* interminable? (pp.214-15)

彼は人間の行為の原因究明は「鬼火」のように捕えがたく、「不可能だ」と言っているのだ。「いかなる因果論も見えるものから見えぬものへの跳躍が必要」であるからだ。見えるものから見えぬものへ——あのシヨウボートの比喩が、ここで思いおこされる。因果論においても想像力の介在が必要なのである。そこまでわかっていながら、彼は欲ばっている。彼は、その跳躍の巾を、つまり「事実と意見の間のギャップ」を小さくしたいのである。彼は父の自殺理由の近似値を求めようとするのである。近似値を求めることは無限性を帯びる。彼の「調査書」が果てしなく膨大な量になっていかざるをえないのを、彼自身がよく知っているのである。

最終的に、Todd は指の醜さに関する Jane の無邪気な一言から、もはや仮面のつけかえでは生き延びられぬと悟り、絶望して自殺を決意する。理性派の彼としては、理性的な理由をどうしても作らざるをえない。そこで、“There’s no final reason for living” (p.223) という命題を作

る。しかし、水上ショウの間にショウボートを爆破して自殺をするという計画が失敗に終ると、“There’s no final reason for living (or for suicide)” (p.245) と命題を書き変える。自殺決行という、現象的には父と同じ行動をとるのであるが、父の自殺理由や、その近似値に至ったわけではなく、逆に書き変えた方の命題は、父の遺書の「空白」をせばめるより、広げるもののように思われる。いずれにせよ、この命題によっても父の遺書の「空白」は埋められないのである。

Todd は生き損ない、かつ死に損なう。此岸にも彼岸にも、彼の受け入れ先はないのである。彼自身が一通のデッドレターのような存在と化すのである。まさに“almost death”の状態にあって、彼は現実を離れ、虚構作りへと赴く他ないのである。先に述べた通り、このようにして *The Floating Opera* は書き始められるのであるが、ここに至って、我々読者には疑念がわいてくる。

読者は書き手と受け手の間に意思伝達が欠如した「手紙」ばかりを見せつけられてきた。棚上げにされた「空白」や、埋められぬままに終わった「空白」を内包する「手紙」ばかりであった。そして、求めればよけい離れていく逃げ水のような、人間同士の相互理解の難しさを示されてきたのである。前述したように、この作品自体が「空白」を含む一通の「手紙」であるわけだが、読者はこの「空白」を埋められるのかという疑念をもたざるをえないのだ。作品の冒頭部で Todd から要請されたように想像力を駆使して「空白」を埋めようと努力したところで、読者は作品の近似値に至るだけではないのか。Todd は“will-o’-the-wisp”という比喩を“law”と“the cause of any human act”の二つに対してあてはめた。この作品も、またひとつの「鬼火」ではないのだろうか。「空白」を棚上げにしながらか、つまり主要部分が理解不能でも、それでよしと見切りをつけつつ、恣意的な作品の近似値に至るのか。あるいは、父の自殺理由に対して、Todd がそうなったように懐疑の迷宮におちいり、近似値さえ手に入らないか——読者はせいぜいそんなところに納まるのがオチでないのだろうか。

ところで、意思疎通の難しさというテーマと、デッドレターという小道具がそろると、我々にはいやでもメルヴィルの“Bartleby”が思いおこされる。Todd は、Bartleby のもつ究極的・絶対的不可解さをもちあわせないが、それでも共通点はなきにしもあらずだ。Todd も弁護士事務所の中で壁を凝視しては、物思いにふけた。彼の朝食はジンジャーナッツではないが、メリーランド風ビスケット三個と決まっており、禁欲的とも思えるほどに、日常生活は規則正しい。そして死への旅路を急いだ。これらの類似は作品のテーマをより強調しこそすれ、弱めるものではない。

さて、結局のところ、この作品は「手紙」のみならず、^レ文^学作^品を読むことの不確実性、（よく言えば多様性、悪く言えば胡乱）までもが示唆されていると考えられる。

「空白ある手紙」に注目すると、ここまでが見えてくるのである。

注

- ※ 本稿は日本英文学会第61回全国大会（1989年5月）における口頭発表に加筆修正を施したものである。
1. John Barth, *The Floating Opera* (Bantam Books, 1972), p.7. 以下、このテキストからの引用は、本文中の（ ）内にその頁数を示す。
 2. Thomas LeClair は“John Barth’s *The Floating Opera*: Death and the Craft of Fiction,” *Texas Studies in Literature and Language*, 14 (1973), 711-30の中で、すでにその旨を指摘している。
 3. Barth は *The Sot-Weed Factor* を書いた時、小説の「ルーツ」に戻りたいという気持があったと、次のようにインタビューの中で答えている。“But there was another impulse, which I understood better retrospectively—to sort of go to the roots of the novel and see whether I could

bring back something new.” Joe D. Bellamy, ed., *The New Fiction: Interviews with Innovative American Writers* (Urbana, Ill.: Univ. of Illinois Press, 1974), p.6.

4. Todd は友人の医師Marvin に自分の死後（自殺決行日の翌日）に健康診断の結果（別表の6）が届くように依頼する。また、「手紙c」とは Mack, Sr. の遺産だが、Todd は弁護士として Mack, Jr. が継承できるように手配する。しかし、彼のとる自殺方法は、Mack, Jr. 夫妻の死も伴うものであるから、Todd が死ねば受け手も死に、遺産は宙に浮く筈である。
5. Todd に自殺方法の啓示を与える水上オペラの広告ビラ（別表のa）は原物通りに作中に記載され（pp.76-80）、演目が紹介されているが、Todd に深くかかわる Whittaker の演目だけは記載されていない。役者の病気による演目さしかえのためである。その意味で、このビラも「空白ある手紙」と考えられるのである。
6. R.D. Laing, *Self and Others* (Pelican Books, 1971), p.86.
7. Todd の輻晦癖のために、自殺決行の日付は曖昧にされている。Barth から David Morrell への手紙によると、Barth の意識の中では、十二宮はこの日付とは無関係であったとのことだ。David Morrell, *John Barth: An Introduction* (The Pennsylvania State Univ. Press, 1967), p.5参照。
8. 祝祭を形作る要素——さかしまの構造、犠牲、仮面——が水上オペラには見られる。ショウボートの船体爆破失敗を、死と再生を表す擬似的行為ととることも可能だ。ミハイール・パフチーン『フランソワ・ラブレの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』（川端香男里訳、せりか書房、1980）参照。